



労働者の主体性の確立を！

2月号の柳本勝彦さんの「灯台」でハッとさせられました。特に、「職場に闘う労働運動が再生し」です。私は雇用延長後現職わずかです。それだけに強い衝撃を受けています。

春闘再構築も、政治の反動化を止める力も問われているのは「職場に闘う労働組合」が肝心だからです。安倍政権の強権的手法を非難しても現状を変える力にはならないからです。勿論、悪法を成立させ、憲法改悪を目指す安倍自公政権の現状に抗議する闘いは重要です。問題は、なぜそんな情勢を招いているのか、といった私たちの主体的なとらえ方の問題です。社会は階級社会です。例を上げると日産のカルロス・ゴーンの年収です。現行法での不正が問題とされていますが、果たして本質はそ

こにあるのでしょうか。公表される彼の年収と現場で働く非正規労働者の年収と比べて見て下さい。ゴーンの年収はこれら労働者が働いた労働をピンハネ（搾取）してきたことですし、問題の本質がここにあります。内部留保も同様です。春闘で「ストを辞さず」の労働者の主体的力が備わっていれば、はき出させる資金があるからです。

私たちの反撃の力は、「不十分にしか闘いきれない労働者の主体に原因がある」、と総括すれば「何をなすべきか」が明らかになるのではないのでしょうか。安倍自公を勝手にさせない階級的な力を、職場の労働組合で作る以外に、現状は変え得ないと思うのですが。

労働大学企画編集委員 佐久間 和俊